

## インフラは世界を見る目を変えるフィルター

### 子供心にも大人心にも響くインフラ

子供の頃に、「はたらくくるま」や工事現場、巨大建造物のかっこよさ、昆虫の美しさに心がザワつく経験をした人は多いだろう。言語化スキルが高くない子供時代にこれらのものたちに魅入られるのは、土木構造物を表すときにしばしば用いられる「用・強・美」を認識する感覚が予め備わっているためではないかと思っている。

大人になるとかつてのように容易に虫に触れなくなり、かっこいい造形物を見つけるのが下手になりがちだが、大人になってしまったからこそ琴線に触れるインフラもある。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」はあまりにも有名な川端康成『雪国』の冒頭だ。ジブリ映画『千と千尋の神隠し』も、トンネルが物語の世界への導入機能を果たしている。橋は、洋の東西を問わず多くの小説のタイトルに含まれるし、道は人生に例えられることが多い。「此岸と彼岸」をつなぐ象徴としてのトンネルや橋、障壁や分岐点がオンパレードの道は、幾らか長い年月を生き、分岐点や暮らす社会の選択を積み重ねた大人にとってこそ意味を成す舞台装置として概念的に広く認識されている。

つまりは、インフラは本来、子供にも大人にも訴求できるはずの要素を充分に有しているもので、「土木マニア」による秘められた鑑賞対象物にするには勿体ないものなのだ。

### 「かたち」の先にある時間と人間のスケール

インフラツーリズムを最初に体験したのは、小谷村の砂防ダムツアーの視察だった。地すべりを避けて神社を何度も曳家させるようなリスクの大きい土地のかたちや条件に沿って様々な工法で作られた砂防ダムを巡り、建設中の裏話を聞き、その技術力に感嘆した。

お気に入りのダムは群馬県の丸沼ダムだ。コンクリートが高価だった時代、資材を節減しながら大規模な構造物を建設するために編み出され、ほんの短い期間のみ採用されたバットレスダムという特異な工法は極めて繊細で美しい。地域ボランティアによる手作りのドラム缶筏「トムソーヤ号」に乗ってその構造を正面から見るができる。地域の方々のダムへの愛と、来訪者に最も美しい角度から見てほしいという想いが伝わり、ぐっとくる。

その他、駅舎からホームまで70mの標高差がある土合駅や、日本鋼管群馬鉄山の専用線として1945年に開業した太子駅（廃駅）も衝撃的だった。土合駅の、折り返さずストレートにただ潜っていく霧に煙る幅広の階段や、ロープウェイで山奥の鉱山から鉱石を運び、鉄道に積み替えるための基幹駅であった太子駅の遺構は、日本の高度経済成長期を支えた時代のパワーと哲学を今に伝える。

いずれも、後味として脳裡に残るのは、この場所にこれを作る必要があり、そのために時代時代の工夫を凝らして土地のありように沿った唯一無二の構造物を作ったという人の営みのスケールと、その恩恵を受けている過去や現在の人間の数限りなさだ。



株式会社JTB 総合研究所 主席研究員 地域戦略部長 <sup>こうの</sup>河野 <sup>こ</sup>まゆ子

## 何のためにインフラを見せるか

インフラ“ツーリズム”という、地域への経済波及を如何に生み出すかという側面や、来訪者の利便を向上させるための基盤整備やプログラム開発に視点が偏りがちだ。それは、「土木の意義と重要性を学ぶための見学・公開」に偏り、管理者のコスト負担が増すばかりであった従来の構造へのアンチテーゼであり、そのこと自体は全く否定しない。見学受入に係るコストを回収し、推進の意義とメリットを共有するプレイヤーを管理者以外にも広げていかない限りは、インフラツーリズムは持続しないからだ。

ツーリズムに消費者が期待することは「掛け替えのない体験」だ。体験とは、現場に行き目的の対象物を見て触れて、解説を読み聞きして理解することでなく、そこから何らかの「後味」や「自分との繋がり」を日々の暮らしに持ち帰ることだ。

美術館に行くと、作品を見ている時間よりも解説文を読んでいる時間のほうが長い人を見かけることがある。一方で、子供向けギャラリートークで作品を前にして気に入った色やモチーフとその理由、その絵を見たときの気分をディスカッションするようなプログラムがある。前者は作品の意味や作者に関するオーソライズされた知見について知ること、後者は個々の作品に対する自分だけの感想を醸成することを通じて作品と向き合う姿勢そのものを知ることが目的で、インフラ

ツーリズムが目指すところは間違いなく後者だ。

インフラは、それぞれに個別の存在理由を持つ人文資源だ。建造物の用途解説や見学ルート・案内人の整備に終始せず、時代や土地のものがたり、施設建設と運用を支えてきた人々の生きざまや日常を伝えることで、「珍しいものを見た」というシンプルな非日常型の観光を超えた重厚な体験の獲得や、それを欲した人、創った人、現在運用している人への共感・リスペクトに繋がる。黒部ダムが毎年100万人の来訪を誇る理由も、特異な乗り物があり景勝地観光と兼ねられるという優位性はあるつつ、あの山奥に巨大な施設を作った「建設のものがたり」の普及が当該施設を唯一無二のものにしたためだ。

そのインフラをもっと美しく眺められる角度や時間帯、遠目ではわからない部材のスケールや運用現場のハードさ緻密さなど、現場でしかわからないものを見たい。そのインフラができる前と後の社会の変化や、それを作るためにぶつかり、乗り越えた壁。過去から現在に至るまでにインフラに関わってきた人間の話を聞きたい。訪れた個々人が、そのインフラに対するお気に入りのポイントを見つけ、インフラというフィルターを通して地域や社会を見る新たな視点を獲得し、自分の過去と照らし合わせた個人的な感慨を抱く。それが、わたしが願う本質的なインフラツーリズムの実現だ。

### 【著者紹介】河野 まゆ子（こうの まゆこ）

平成12年東京大学文学部美術史学専攻卒。旅行会社勤務後、平成18年筑波大学大学院修士課程世界遺産専攻を修了し同年より現職。インフラツーリズム有識者懇談会委員、手づくり郷土賞選定委員（国土交通省）等の公職を歴任。文化資源学会所属。